

モンゴル西部における東西文化交流の拠点 ——2017年ハルザン・シレグ遺跡調査の報告とその後——

村岡 倫* 中田 裕子**

A Study on the Base of the East-West Cultural Exchange in Western Mongolia : Report of the 2017 Harzan-Shileg Site Survey and Afterwards

Hitoshi MURAOKA *, Yuko NAKATA **

This article is a report on the investigation and research of the Harzan-Shileg site, which was conducted in Mongolia in 2017, compared to Chingai Castle, an important military base during the Mongolian Empire. Prior to that, in 2016, we found both feet of 27 cm and both hands Buddha statue in the ruins. This Buddha image was from the first half of the 13th century during the Chingghis Khan period. In this project, we conducted further excavations and analyzed excavated artifacts in September 2017.

In addition, we conducted a survey of the surrounding area and considered how various people who traveled between East and West were interacting in this area during the Mongol Empire, a multi-ethnic society. The Sharga area, where the ruins of Harzan-Shileg are located, is located just beyond the Altai Mountains from Central Asia.

Once upon a time, people who traveled between Central Asia and the Mongolian Plateau would have had the energy to rest in the area of Harzan-Shileg and continue their journeys.

In order to clarify the base of the traffic route, the inscriptions left on the rock walls by the archaeological sites and people who come and go are also important materials. The purpose of this project was to investigate the traffic routes on the Mongolian Plateau. The project also cut out, transported, and stored Buddha statues in 2017. This is because Buddha statues are historical discoveries and we consider them important from the viewpoint of cultural property protection.

はじめに

本稿は、龍谷大学国際社会文化研究所の研究プロジェクトによって、2017年度にモンゴル国で行なったハルザン・シレグ遺跡の調査・研究の報告である。本遺跡は、モンゴル帝国時代の重要な軍事拠点チンカイ城に比定される。チンカイ城とは、モンゴル帝国の創始者チンギス・カンの命を受け、重臣の田鎮海が1212年にモンゴル西部のアルタイ地方に建設したもので、その名称は彼の名にちなんでいる。この地には屯田が開かれ、鉄製品の生産も行なわれるなど、大規模な兵站基地として1219年から始まったチンギス・カンの中央アジア遠征を支えた。さらには、1260年の第5代クビライの即位後も、中央アジアの反クビライ勢力に対する元朝側の最前線基地として、重要な

* 龍谷大学文学部教授

** 龍谷大学農学部准教授

意味を持っていた。

まず、今回の調査に至るまでの経緯を簡単に述べよう。チンカイ城の位置に関しては、具体的なことを記す史料がほとんどない。唯一、当時、北中国で隆盛を極めた道教の一派、全真教の指導者である長春真人が、チンギス・カンの招請を受けて西征中の彼のもとへ弟子たちを引き連れて旅をした際の旅行記、『長春真人西遊記』（同行した弟子の一人、李志常が著す。以下、『西遊記』と略）に比較的詳細な記述が見えるだけである。これまでも多くの先学が、『西遊記』に基づきチンカイの位置について検討を加えてきた。それらの見解はモンゴル高原西部のアルタイ山脈北麓にあったという点では大方一致しているが、具体的な位置については様々な説が唱えられ、定説と呼べるものはなかった（主な説については、中田・村岡 2018: 4-5 参照）。

そこで、我々の研究グループは、まず、2001年に現地調査を行ない、『西遊記』の記述やモンゴル側の情報をもとにゴビアルタイ県シャルガ郡にある農耕地跡を調査し、『西遊記』に記されるチンカイ城周辺の景観とシャルガ農耕地跡周辺の地理的景観が、ほぼ一致することを確認し、さらに、農耕地跡で採集された陶磁器片が中国河南地方の鈎窯の産であり、チンギス・カンと同時代のものと複数の専門家によって鑑定されたことから、シャルガ地域がモンゴル帝国時代のチンカイの地である可能性は高いと考えた（以上、2001年の調査の詳細については、松田・村岡・白石 2002、村岡 2003、中田・村岡 2018などを参照）。

そして、その後、入手した航空写真に土城らしきものが写っていたことから、2004年に再調査を行ない、ハルザン・シレグ遺跡を発見したのである。実測図面を作成し、表面調査を行なったところ、前回と同じ鈎窯系陶磁器が散乱していた。また、採取した他種の陶磁器片の中に、その胎土中に炭化した植物繊維が混入されていたものがあり、これを放射性炭素年代測定法（C 14 測定法）による分析を行なったところ、1160年～1255年という結果が得られた。まさしくチンギス・カン時代、チンカイ城が設立された時代に重なるものであった（2004年の調査については、鈴木・中田 2006、Очир／Энхтөр 2006、村岡 2006、村岡 2007、白石 2008 参照）。

その後、しばらく調査する機会にめぐまれなかったが、2014年、10年ぶりにシャルガを訪れ、発掘調査を行なうことができた。出土した木片と骨片のC 14年代測定の結果、木片の年代は13世紀初頭のチンカイ城建設時に、骨片のそれは14世紀のモンゴル・元朝時代に、それぞれ重なり、我々は、改めてハルザン・シレグ遺跡こそ、チンカイ城であると確信した。ところが、2014年の発掘ではさらに注目すべき事実が明らかとなった。ハルザン・シレグ遺跡には二つの生活層が存在するのである。13～14世紀の層より深い層があり、そこから出土した木片と骨片のC 14年代測定による分析の結果、5～7世紀のものであることが判明した。これは、ハルザン・シレグ土城の創建時期を考える上で重要な発見であった（2014年の調査については Очир 2016、およびそれも含む松田〔編〕2016 所載の各報告・論考に詳しい）。

そこで、2016年には、5～7世紀のモンゴル高原史を専門とする、龍谷大学農学部・食料農業システム学科の中田裕子を代表として申請した科学研究費補助金・基盤（C）「5～7世紀におけるモンゴルの土城址および中央アジアの交易路に関する総合的研究」が採択され、再び発掘調査を行なったところ、思わぬものが出土したのである。それは、四角の台の上に並んだ長さ 27 cm の裸足の両足と両手であり、人間大の仏像の一部と思われた。足部の芯棒として使われていた樹木や周辺で採取した骨などを、C 14 測定法によって分析すると、やはり、チンギス・カンの勃興から晩年、

13世紀前半期のものであることが明らかとなった〔中田・村岡 2018: 29〕。

この成果については、2017年3月にモンゴル国で、ついで日本では4月に龍谷大学を通して記者会見を行なっている。両国において、多くの新聞社が紙面やネット配信によって報道し、各方面で高い関心が寄せられた。この仏像の足部について、中央アジアの仏教文化の専門家である、龍谷大学学長の入澤崇教授は、前述の記者会見の折、両足の上部に残っている着衣の裾の襷の形体から、中央アジア系統、例えばガンダーラの特徴を持っているという見解を示した。この地の歴史的な位置付けを考える上で、示唆に富む重要な指摘である。

これまで、各研究機関によって行なわれてきたモンゴル各地の遺跡の調査で、一部とは言え、このような人間大の仏像が発見された例はなかった。出土した仏像の周囲には建造物らしきものがあり、寺院の可能性もある。モンゴル帝国は広域を支配し、多民族融合の社会を築き上げたことはよく知られている。ハルザン・シレグの地は、モンゴル高原からアルタイ山脈を越えて中央アジアへ通じる交通路の要衝であった。

2017年の本プロジェクトでは、さらなる発掘調査を行ない、出土遺物を研究・分析し、多民族融合の社会であったモンゴル帝国の時代、東西を往来する多様な人々が、この地でどのような交流を行なっていたのかを解明する手掛かりを得ることを目的とした。また、2016年の調査では、仏像を発掘現場に埋め戻さなくてはならなかった。切り出して運搬し、保護するにはさらに費用がかかるからである。本プロジェクトは、仏像の切り出し、運搬、そして保管することも計画に組み込んだ。仏像は歴史的な発見であり、文化財保護の観点からも重要と考えたからである。



写真1 出土した仏像の手足



図1 2017年度調査関連のモンゴル国地図

I. ハルザン・シレグ土城で実施した 2017 年度発掘調査の概要

2017 年に実施された発掘調査は、モンゴル国際遊牧文明研究所のオチル教授を中心に、エルデネボルド、マンドフバヤルらが主導した。これについては、すでにモンゴル語で報告がなされているが [Очир/Эрдэнэболд/Мандахбаяр 2018]，ここでは、その報告書に基づき、調査の概要と成果を紹介することにしたい。なお、初めに、本プロジェクトの研究協力者である松川節（大谷大学）撮影の航空写真をあげておく（写真 2・3）。



写真 2 ハルザン・シレグ土城



写真 3 2017 年、ハルザン・シレグ遺跡の発掘状況

1. 遺跡の概要

モンゴル国に現存し、調査・研究が不十分なモンゴル帝国時代に関連する都市や農業集落の調査を促進することは、中央アジアの遊牧民の歴史・文化、都市建設の発達状況および経済社会史の多面的研究課題の解明が期待され、さらに新たな研究資料の発見と調査の基盤拡大に対して、大きな意義を持つものである。

モンゴル・日本合同プロジェクトの現地調査隊は、2014 年、2016 年にモンゴル国ゴビアルタイ県（アイマク）、シャルガ郡（ソム）に位置する、中世ごろのハルザン・シレグという都市遺跡で発掘調査を実施し、興味のある成果を得た。これを受けて、さらに 2017 年にも、龍谷大学の研究支援により、同都市遺跡で考古学的再調査を行なった。この調査により、遺跡の年代に関連する証拠資料が発見され、構造・組織解明の進展が期待できる成果を得た。

ハルザン・シレグ遺跡は、ゴビアルタイ県シャルガ郡内、シャルガ川の南岸に位置する。調査隊が同遺跡を初めて発見したのは、2001 年の現地調査後のことであり、航空写真によるものであった。その後、2004 年夏季の調査の際に現地で実見し、測量図、調査報告書 [Очир/Энхтөр 2006] などを作成した。ハルザン・シレグ遺跡は北緯 46 度 12 分 51.8 秒、東経 95 度 13 分 42.9 秒、標高 996 m に位置する。

この遺跡は周りを土壁で囲まれた小規模の居住地跡である。土城はほぼ四角形構造で、中央部に東西方向に長く伸びる隅丸方形建築物の遺址が 1 つある。遺跡が位置する地形は、傾斜面になっているため、雨水にかなり水蝕されて、城内に砂礫が堆積している。中央部の建築物址のマウンドは、最高点が約 1.4 m、最低点が約 0.6 m である。土城は東壁の長さが 190 m、西壁の長さが 220

m、北壁の長さが190 m、南壁の長さが170 mで、形として正確な正方形ではない。土城の出入り口は東側の壁にあったようである。出入り口と思われる壁は欠けた部分の長さが約17 mである。ハルザン・シレグ土城内の建築址とその周辺から、生活用品と思われる陶磁器の破片を数多く発見した。その破片の多くは波状文や二重波状文で、暗褐色、灰色、紅色の粘土で作られた焼成の良い破片であった。

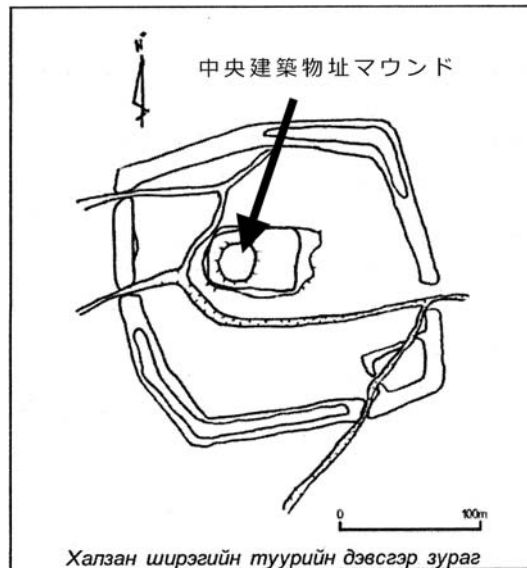


図2 ハルザン・シレグ遺跡実測面
〔Очир／Энхтөр 2006, p.22 に加筆〕

2. 発掘調査

2014年と2016年に、合同プロジェクト調査隊は、ハルザン・シレグ遺跡の3箇所で大規模の試掘を行なった。2016年の発掘調査で発見された最も興味深いものは、粘土で作られた仏像の足と手の部分であった。その遺物から、同建築物は生活用の建物であったのか、あるいは寺院の建物であったのではないかという問題が出てきたのである〔Очир／Эрдэнэболд 2017, 中田・村岡 2018〕。粘土製の仏像は、作製当初から2段階の平らな台の上に作られたのが明らかであった。下の台は80×80 cm サイズの四角形で、厚さは20 cm。台の作り方は、四角形の型に茶色の粘土を入れ、よく固めて、その上に茶色の細かい粒の粘土で上塗りをして磨き、4つの角を少々丸くして形作っている。さらにその上に、同じ方法で2番目の台を作り、2番目の台のサイズは70×50 cm、厚さは10 cmである。そして、その上に仏像を作り、多色材で染色したようだ。座ったあるいは立った姿勢であったようで、仏像の胴体や頭部は壊れたようで残っておらず、足の部分だけが残っていた。仏像は北西方向に向いて作られており、肌足の状態で、両足の指と脛までの部分が完全に残っている。両足のあいだと脛の外側に、服装の裾の部分が残っている。

仏像は小さい部屋に安置されており、その小部屋は、44×20×9 cm サイズの植物片を混入する日干しレンガと褐色粘土を用いて積み上げ、その内側と外側に漆喰を薄く塗り、その上に赤色の自然塗料を塗った壁を持つ。我々は「お供え物部屋」と名付けた。この部屋が同建築物の東南隅に位置しているのは、たいへん興味深い。部屋の北壁に65～70 cmの欠けた部分があるのが同部屋の

出入口部であろう。

2017年度の発掘は、2016年度の継続調査であった。そのため、発掘開始前に、前年度発掘の全エリアを露出させた。2017年度は、前調査により発見された建築物の東南隅の部分全体を発掘調査することにした。また、前年に発見した「お供え物部屋」および生レンガ壁の部屋の付近、さらに建築物の南壁の付近の調査・解明することを目的とした。2017年度に発掘した面積は、建築物マウンドの東南部を含めた7.0×7.0 mのエリアであった。



写真4 仏像周囲の「お供え物部屋」跡

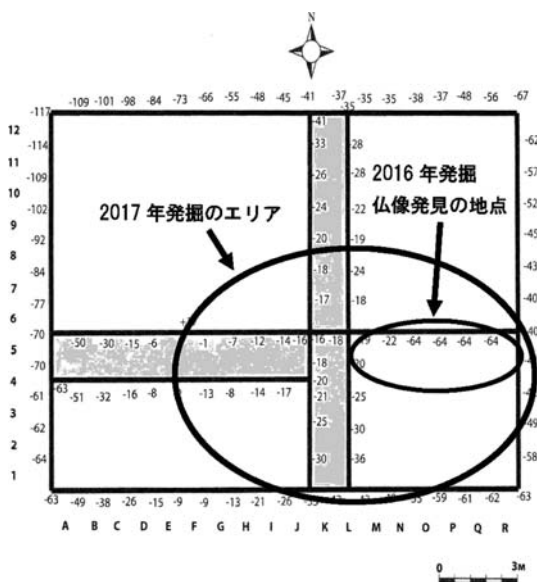


図3 中央建築址マウンド概略図（網掛け部分は2014年発掘）
〔Очир 2016, p.13 に加筆〕

我々は、調査の第1段階で深さ約10～12 cmの発掘を行なったが、発掘中に、2016年の発掘で発見したものと同じ、外側に白色粘土を薄く塗った紅色の壁の残骸を発見した。壁のこの部分は、16年に発見したものと連なっており、今回の現われたものと合わせると、長さ9.2 mの長さに繋がっていることが判明した。壁はかなり崩れているため、厚さは薄かったり、厚かったり、壁の西方の部分に当たる箇所では厚さが65 cmあった。壁は、日干し生レンガを横方向に一線に並べ、その外側に今度は縦方向に一線に並べたものであることが明らかになった。これは、同建築物の南側の壁であろうと思われる。この壁を発見した標高より40 cm下に、建築物の打ち固めた床が発見された。床は、日干しレンガを並べて、その隙間に茶色の粘土を入れ、よく固めた作り方であった。床の構造は、日干しレンガの下に砂を薄く敷いて、その上にどろどろの茶色粘土を流し、さらにその上に日干しレンガを並べた状態である。

日干しレンガを敷いた床の部分は、完全に残った壁沿いに、縦の長さは6.7 m、横の長さは、それぞれ西方の部分が35 cm、真ん中の部分が95 cm、東方の部分が80 cm 残っていた。

2017年度の発掘で南側壁に沿って、内側に4.5 m 離れて平行する、もう1つの壁の残りを発見した。作り方は、南側壁と違い、日干しレンガを使わずに、茶色の粘土をつき固めて作った構造であった。発掘の第2段階、つまり約20 cm の深さで、南側壁の内側で発見されたレンガを並べた床と同じ標高で、打ち固めた床が発見された。床は50×23 cm の日干しレンガを並べて作っている。床の部分は縦が93 cm、横が7.1 m であった。北側の壁は長さが7.2 m、厚さが90 cm、高さが70 cm である。我々は建築物内の部屋の壁の残りであろうと推測している。しかし、その付近で破壊された日干しレンガの壁の残りが、広い範囲で発見されたのは、そのつき固めた壁の上に、日干しレンガを並べていたという証拠になると思われる。

発掘の各段階で、色は、紅色、暗褐色、茶色、青色、黒色の、模様は、矢来状、菱形または花形、針葉樹形など、そして焼きの良い、生活用の陶磁器の破片が数多く発見された。また小型家畜の骨なども多く出土した。そして、少数の骨角器、鉄滓、真鍮製品の一部、石製品・鉄製品の破片なども出土している。

2017年度発掘調査は、基準点から110～120 cm の深さまで、つまり建築物の壁の基礎と日干しレンガを並べて作った床に達するまで実施した。我々は、床の構造を調査する目的で、1.0×2.0 m の試掘溝を掘ったが、床の下側に厚さ12～15 cm の砂質土が敷かれていた。しかし、その床下の砂よりも25 cm ぐらい下の層から、家畜・動物の骨と少数の生活用の陶磁器の破片が出土した。その他、興味深いのは、同時に崩れ落ちたようで、原位置を保った、屋根瓦の数多くの破片が発見されたことである。発掘下層で発見されたそれらの破片は分厚く、表面が良く整形されて、全体的に緩やかに湾曲し、赤褐色の粘土で作られ、焼成は良好であった。屋根瓦の破片は赤褐色で、表面に白色の層が確認できた。また破片は粉々になっているために、瓦の1点のサイズと作り方、形などを確定することはできなかった。

130×60 cm に集中して落ちていた紅色の粘土で作った焼成のよい屋根瓦は、これまで我々が発掘調査をしてきた建築物とは、異なった時代のものであると考えられるいくつかの特徴がある。第1に、これまでの発掘調査により、これらと同種類の屋根瓦の破片は発見されていないということ。第2に、我々は、上部の建築物に関して、日干しレンガの壁と木製の棟、その上に茶色の粘土を敷いてから、低木類の植物を被せた屋根の建築物であったと推測していたが、それに反して瓦が出土したということ。第3に、上部建築物の壁の基礎と同じレベルの床の下で発見された遺物であるから、上部建築物とは関係のないものであるということ。第4に、下の層で発見された建築部材の遺物と少数の生活用陶磁器の破片などは、上の層から出土した遺物とは質に違いがあること。それらを強調したい。

2017年に、ハルザン・シレグ遺跡で行なった考古学的発掘により、発見した遺物の数量は、合計265点、その内訳は、家畜・動物の骨60点、石製道具の部分11点、鉄滓6点、貝殻1点、生活用の陶磁器破片85点であった。

3. 2017年の発掘の成果と意義

ハルザン・シレグ遺跡において、上述のような発掘調査を行なったことは、モンゴル国内で発掘

調査を実施した都市・集落遺跡のうち、最も西端で行なわれた発掘として大きな意義を持つ。そのため、今回の発掘調査は、同地域での都市建設史および文化の多面的な研究課題の解明に繋がるものであろう。

土城中央に位置する建築物は長方形で、つき固めた茶色の粘土と日干しレンガを並べた分厚い壁といくつかの部屋から構成されるものであった。建築物を建てた時、茶色の粘土をつき固めて作った高い土台の上に、 $47 \times 23 \times 9$ cm の日干しレンガを並べ、壁を作っている。建物のその他の構造、たとえば屋根と出入口などについては、今のところ詳細に説明することはできない。

ハルザン・シレグ遺跡の周囲は、シャルガ川沿いに位置する農民集落と考えられる。発掘により農業用の道具などの遺物が出土しなかったが、シャルギン・ゴビのこの方面は、農業の営みによく適しているため、この方面で農業を営んでいた人々の集落であると思われる [Очир／Эрдэнэболд 2017: 224, 中田・村岡 2018: 17, 30]。

土城内で行なった発掘調査の結果などから見れば、かなりの住民がある程度の期間、定住していたことは明らかである。土城の中央に位置する建築物は、大きさ、構造、壁の厚さなどから、土城内で長期間をかけて出来たように思われる、文化的階層および建築物の床の下から発見した、異なった時代の屋根瓦の破片などから、以上の結論に至った。

同遺跡は、発掘調査で発見した遺物の性質と詳細な科学分析の結果、12～13 世紀の建造であることは明らかになっている。2014 年度と 2017 年度の調査の際には、この時期の中国製陶磁器片は出土しなかったが、2004 年の初調査の際、同遺跡の測量調査時に、黒瓷、白瓷、瓷甕、中甕などの多種類の白色、青色の陶磁器の破片が数多く発見・収集された [Очир／Энхтөр 2006]。これらの陶磁器は、モンゴル地域で製造されたものではなく、中国地域で製造されていた典型的な陶磁器であり、同遺跡の年代解明に役に立った。

一方で、2017 年度の発掘調査では、建築物の床の下から、異なった時代の建築物と生活用品の遺物が発見されている。また、数は少ないながらも、ウイグル時代に属すると見なされる生活用の陶磁器の破片が出土したことなどは、同遺跡の文化的階層は、交通路の拠点として長く機能していた可能性を表すものと考えられよう。



写真 5 2017 年出土の陶磁器等の遺物



写真 6 2017 年調査隊メンバー

II. ハルザン・シレグ遺蹟における放射性炭素年代（AMS 測定）および炭素・窒素安定同位体分析

ここでは、2017 年に遺跡から出土した遺物の C 14 年代測定を依頼した加速器分析研究所の分析結果〔加速器分析研究所 2018〕を転載する。

1. 測定対象試料

ハルザン・シレグ遺跡は、モンゴル国ゴビアルタイ県シャルガ郡に所在する。測定対象試料は、木炭 4 点と骨片 1 点の合計 5 点である（表 1）。木炭 4 点については放射性炭素年代測定を、骨片 1 点については年代測定と炭素・窒素安定同位体比及び含有量の測定を実施する。

なお、試料グループ 2 の 2 は、当初炭化した骨と見られたが、断面を観察した結果、導管と放射組織が確認され、散孔材（種類は不明だがカエデ属に似た特徴を持つ）の木炭と判断された。

2. 測定の意義

遺跡の年代を明らかにする。

3. 年代測定試料の化学処理工程

(1) 木炭の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1 mol/l（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001 M から 1 M まで徐々に濃度を上げながら処理を行なう。アルカリ濃度が 1 M に達した時には「AAA」、1 M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- 6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(2) 骨（ヤギ／ヒツジ）の化学処理

- 1) 骨・歯試料はコラーゲン抽出（Collagen Extraction）を行なう（表 1 に「CoEx」と記載する）。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、付着物を取り除く。試料をビーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行なう。
- 2) 0.2 M の水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったビーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで、1 時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉碎用セルに入れ、粉碎する。リン酸塩除去のために試料を透析膜に入れて 1 M の塩酸で酸処理を行ない、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え、90℃ に加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラ

ーゲンを得る。得られたコラーゲンを2つに分け、一方を年代測定用、他方を安定同位体分析用の試料とする。

3) 抽出した試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。

以下、(1) (4) 以降と同じ。

4. 年代測定試料の測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行なう。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 炭素・窒素安定同位体比及び含有量測定試料の化学処理工程と測定方法

3 (2) 2) の工程で、コラーゲンを得る。

3) 抽出したコラーゲンを EA (元素分析装置) で燃焼し、 N_2 と CO_2 を分離・定量する (表 3)。

4) 分離した N_2 と CO_2 は、インターフェースを通して質量分析計に導入し、炭素の安定同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$) と窒素の安定同位体比 ($\delta^{15}\text{N}$) を測定する (表 3)。

これらの処理、測定には、元素分析計-安定同位体比質量分析計システム (EA-IRMS: Thermo Fisher Scientific 社製 Flash EA 1112- DELTA V Advantage ConFloIV System) を使用する。 $\delta^{13}\text{C}$ の測定では IAEA の C 6 を、 $\delta^{15}\text{N}$ の測定では N 1 を標準試料とする。

6. 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料 (PDB) からのずれを示した値である。 $\delta^{15}\text{N}$ は、試料窒素の ^{15}N 濃度 ($^{15}\text{N}/^{14}\text{N}$) を測定し、基準試料 (大気中の窒素ガス) からのずれを示した値である。いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰) で表される。 $\delta^{13}\text{C}$ は AMS 装置と質量分析計で測定され、AMS 装置による値は表中に (AMS) と注記し (表 1)、質量分析計による値は表中に (MASS) と注記する (表 3)。 $\delta^{15}\text{N}$ は質量分析計による値で、表中に (MASS) と注記する (表 3)。

(2) ^{14}C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0 yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する

較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行ない、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal 13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv 4.3 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

7. 測定結果

試料の測定結果を表 1~3 に示す。

試料の ^{14}C 年代は、グループ 1 の 1 (木炭) が 890 ± 20 yrBP、グループ 1 の 2 (骨 (ヤギ/ヒツジ)) が 820 ± 20 yrBP、グループ 2 の 1 (木炭) が 900 ± 20 yrBP、グループ 2 の 2 (木炭) が 660 ± 20 yrBP、グループ 3 (木炭) が 690 ± 20 yrBP である。暦年較正年代 (1σ) は、グループ 1 の 1 が 1055~1205 cal AD の間に 3 つの範囲、グループ 1 の 2 が 1208~1256 cal AD の範囲、グループ 2 の 1 が 1047~1167 cal AD の間に 3 つの範囲、グループ 2 の 2 が 1287~1385 cal AD の間に 2 つの範囲、グループ 3 が 1277~1377 cal AD の間に 2 つの範囲で示される。採取された深さと得られた年代値の前後関係は、おおむね整合的であるが、一部上下で重なり合う部分もある。

年代測定のみ行なった木炭試料 4 点の炭素含有率は、72% (グループ 1 の 1)~85% (グループ 2 の 1) で、いずれも適正な値である。

なお、木炭とされるグループ 1 の 1、グループ 3 は、 $\delta^{13}\text{C}$ の値から C4 植物の可能性が高い。グループ 3 は径 5~12 mm の破片を含み、グループ 1 の 1 はより断片的だが木本状である。種類は不明だが、両者とも木部と師部が層状に繰り返す構造が観察される。日本ではマメ科フジ属などのつる植物に似た構造が見られる。

次に、コラーゲン抽出を行なった骨試料グループ 1 の 2 の安定同位体比について検討する。 $\delta^{13}\text{C}$ は -17.7‰ 、 $\delta^{15}\text{N}$ は 9.11‰ となっている。試料の保存状態について検討すると、コラーゲン回収率 (=コラーゲン量/処理した試料量) は 18% で、おおむね適正な値と見られる。また、炭素含有率が 45.6%、窒素含有率が 16.5% といずれも骨コラーゲンとしておおむね適正かやや高い値となっている (van Klinken 1999)。C/N 比は、重量比で 2.8、モル比で 3.2 となっており、現生動物骨と同程度と見なされる (DeNiro 1985, Hare and von Endt 1990)。以上のことから、今回の測定結果は試料となった骨コラーゲンの本来の特徴をおおむね問題なく示していると判断される。

今回の安定同位体分析の結果をモンゴルにおける現生生物のデータと共に散布図に示す (図 2)。これらの現生種サンプルの生息環境や食性は、測定された骨と同時代、同地域のものとは必ずしも同じではないと考えられるので、グラフに示されたデータはあくまでも参考値である。

なお、このグラフに表されたヤギ・ヒツジにおいて、家畜が野生種に比べて高い $\delta^{13}\text{C}$ を示すことについては、家畜は C4 植物を飼料として摂取しており、その期間が野生の状態に比べて長い季

節にわたるためと説明されている (Makarewicz and Tuross 2006)。家畜が野生種よりも高い $\delta^{15}\text{N}$ 値を示す理由は不明である。オオカミは、野生のヤギ・ヒツジより ^{15}N が濃縮された値を示すが、このグラフに示された家畜種に比べ、大きく濃縮はされていない。このデータは毛のケラチンの安定同位体比であるため、骨のそれと比べ、 $\delta^{13}\text{C} \cdot \delta^{15}\text{N}$ とも、やや低い値を示していることが考えられる (O'Connell et al. 2001)。

今回測定したグループ1の2は、ヤギ／ヒツジの骨と考えられており、測定結果も野生または家畜のヤギ・ヒツジに近い値を示す。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-172241	グループ1の1	モンゴル国ゴビアルタイ県シャルガ郡 ハルザンシレグ遺蹟 深さ: 220 cm	木炭	AAA	-10.31 ± 0.41	890 ± 20	89.55 ± 0.25
IAAA-172241	グループ1の1	モンゴル国ゴビアルタイ県シャルガ郡 ハルザンシレグ遺蹟 深さ: 220 cm	木炭	AAA	-10.31 ± 0.41	890 ± 20	89.55 ± 0.25
IAAA-172242	グループ1の2	モンゴル国ゴビアルタイ県シャルガ郡 ハルザンシレグ遺蹟 深さ: 220 cm	骨 (ヤギ／ヒツジ)	CoEx	-15.98 ± 0.46	820 ± 20	90.25 ± 0.27
IAAA-172243	グループ2の1	モンゴル国ゴビアルタイ県シャルガ郡 ハルザンシレグ遺蹟 深さ: 110 cm	木炭	AAA	-23.29 ± 0.46	900 ± 20	89.38 ± 0.25
IAAA-172244	グループ2の2	モンゴル国ゴビアルタイ県シャルガ郡 ハルザンシレグ遺蹟 深さ: 110 cm	木炭	AAA	-25.09 ± 0.33	660 ± 20	92.14 ± 0.28
IAAA-172245	グループ3	モンゴル国ゴビアルタイ県シャルガ郡 ハルザンシレグ遺蹟 深さ: 64 cm	木炭	AAA	-10.41 ± 0.40	690 ± 20	91.80 ± 0.27

[IAA 登録番号: #8912]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值, 暦年較正用 ^{14}C 年代, 較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-172241	650 ± 20	92.27 ± 0.24	886 ± 22	1055 calAD-1077 calAD (19.3%) 1153 calAD-1192 calAD (43.0%) 1198 calAD-1205 calAD (5.9%)	1046 calAD-1094 calAD (28.6%) 1120 calAD-1141 calAD (7.6%) 1147 calAD-1217 calAD (59.2%)
IAAA-172242	680 ± 20	91.93 ± 0.26	823 ± 23	1208 calAD-1256 calAD (68.2%)	1170 calAD-1261 calAD (95.4%)
IAAA-172243	870 ± 20	89.69 ± 0.24	902 ± 22	1047 calAD-1089 calAD (39.1%) 1122 calAD-1139 calAD (12.7%) 1148 calAD-1167 calAD (16.5%)	1040 calAD-1109 calAD (48.5%) 1116 calAD-1207 calAD (46.9%)
IAAA-172244	660 ± 20	92.12 ± 0.27	657 ± 23	1287 calAD-1305 calAD (31.1%) 1364 calAD-1385 calAD (37.1%)	1280 calAD-1319 calAD (45.7%) 1351 calAD-1391 calAD (49.7%)
IAAA-172245	450 ± 20	94.56 ± 0.27	687 ± 23	1277 calAD-1298 calAD (61.4%) 1373 calAD-1377 calAD (6.8%)	1271 calAD-1306 calAD (72.7%) 1362 calAD-1385 calAD (22.7%)

[参考値]

表 3 炭素・窒素安定同位体比及び含有量

試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (MASS)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰) (MASS)	C 含有量 (%)	N 含有量 (%)	C/N 重量比	C/N モル比
グループ 1 の 2	-17.7	9.11	45.6	16.5	2.8	3.2

注) 表 3 に結果を示した炭素と窒素の安定同位体比および含有量の測定は、昭光サイエンス株式会社の協力を得て行なった。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- Davie, H. et al. 2014 Carbon and nitrogen stable isotope values for plants and mammals in a Semi-Desert Region of Mongolia, *Mongolian Journal of Biological Sciences*, 12(1-2), 33-43
- DeNiro, M. J. 1985 Postmortem preservation and alteration of in vivo bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction, *Nature* 317, 806-809
- Hare, P. E. and von Endt, D. 1990 Variable preservation of organic matter in fossil bone, *Annual Report of Director of the Geophysical Laboratory, Carnegie Institution, Washington, 1989-1990*, Geophysical Laboratory, Washington D. C., 115-118
- Makarewicz, C. and Tuross, N. 2006 Foddering by Mongolian pastoralists is recorded in stable carbon ($\delta^{13}\text{C}$) and nitrogen ($\delta^{15}\text{N}$) isotopes of caprine dentinal collagen. *Journal of Archaeological Science*, 33 : 862-870
- O'Connell et al. 2001 Isotopic Comparison of Hair, Nail and Bone : Modern Analyses, *Journal of Archaeological Science*, 28, 1247-1255
- Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal 13 and Marine 13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
- van Klinken, G. J. 1999 Bone collagen quality indicators for palaeodietary and radiocarbon measurements, *Journal of Archaeological Science*, 26, 687-695

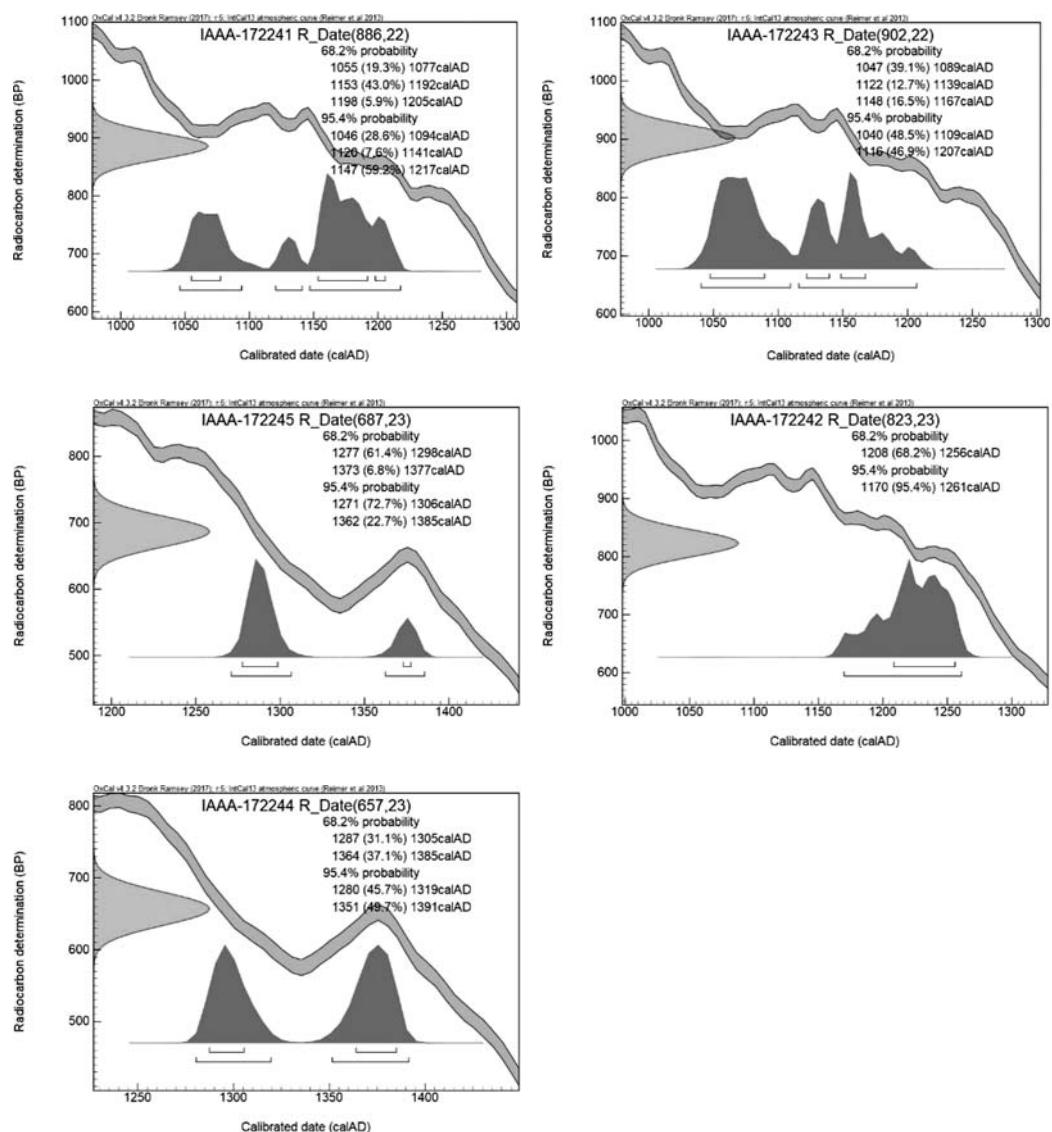


図4 暦年較正年代グラフ（参考）

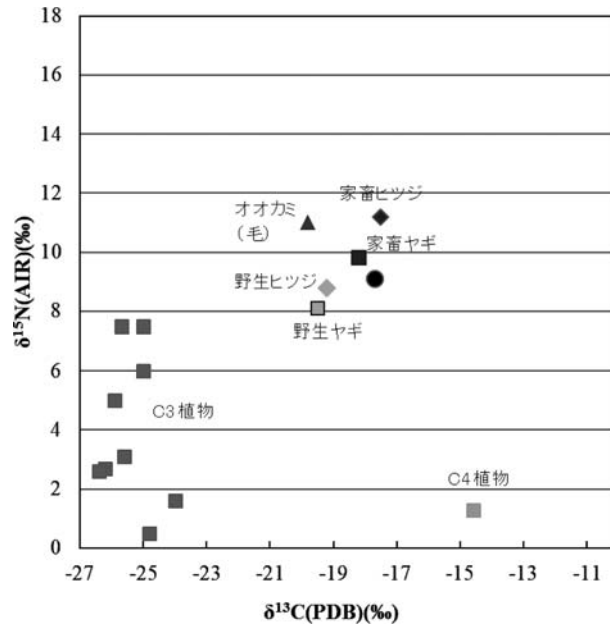


図5 炭素・窒素安定同位体比グラフ（参考）

●は測定試料。

他はモンゴルにおける現生生物のデータを散布図上に表示。

C3・C4植物はDavie et al (2014; p.37; Table 2) によるDornogobi 郡Ikh Nart 自然保護区のデータで、C3植物は8種類の植物の、それぞれ複数個体の平均値、C4植物は1種類の植物の複数個体の平均値である。

草食動物であるヒツジ・ヤギは,Makarewicz and Tuross (2006; p.868; Table 4) によるChuluu のBaga Gaz-ar'in で採取された臼歯の象牙質から抽出されたコラーゲンのデータで、複数個体の平均値である。

オオカミはDavie et al (前掲;p.37; Table 2) による,Ikh Nart 自然保護区のデータで、1種類複数個体の毛のケラチンのデータの平均値である。



グループ1の2（表）



グループ1の2（裏）

図6 骨試料の写真

Ⅲ. モンゴル高原における交通路の拠点

前稿では、ハルザン・シレグ遺跡が、長くモンゴル高原から中央アジアへ向かう東西交通路の拠点であったことを指摘した〔中田・村岡 2018〕。ここでもまず、モンゴル帝国期以前のハルザン・シレグ遺跡の意義を交通路の観点から考察したい。

この遺跡は、2014年に最初の発掘調査が行なわれたことは前述の通りである。その結果、日常生活に用いられた陶磁器の破片、大型家畜・小型家畜の骨、骨製品、そして、鉄滓や鉄製品などが多数出土した。さらに、ハルザン・シレグ土城の囲郭外およびそこから西へ2.5～3キロ離れたサンダギーン・バイシン（「バイシン」は清朝時代の建物）の近辺、シャルギン・ツァガン・ノール（シャルガの白い湖）の東側などを調査した結果、古い陶器片などが見つかった。このことは、土城の周辺地域でも古くから人々が定住して生活しており、この地が屯田であったことを裏付けるものである。

また、すでに述べたように、この発掘では、モンゴル支配以前と見られる層からも木片と骨片が出土しており、C14測定法によって分析した結果、これらが5～7世紀のものであることが判明した。これにより、唐代以前からもこの地に人々が居住しており、西方や南へ通じる重要な拠点である可能性が高まったのである。その頃、この地域を支配していたのは、トルコ系遊牧民・高車やモンゴル系の柔然であった。5世紀初頭、柔然の初代可汗、社崙はモンゴル高原の遊牧民諸集団を制圧し、西は中央アジアの焉耆、東は朝鮮半島北部、北はバイカル湖の付近まで領土を広げた。「草原のシルクロード」は、まず柔然によって支配されることになった。高車も、この時に柔然の勢力下に置かれた。

一方、華北では北魏が勢力を広げ、柔然と衝突を繰り返し、江南では、やや遅れて420年、宋が建国され、その後、齊、梁、陳と、いわゆる南朝の変遷があり、ユーラシアの東方では、三つの大国が鼎立するという状況が生まれた。実は、この当時の国際情勢こそが、ハルザン・シレグ遺跡が「草原のシルクロード」の重要拠点として機能する大きな転機となったと考えられるのである。

442年、北涼王である沮渠無諱と沮渠安周の兄弟が敦煌から鄯善に至り、高昌を占領した。その際、高昌の太守、闕爽は柔然に逃走したが、460年、柔然が沮渠安周を殺害し、高昌の大涼政権を滅ぼし、闕爽の族人であった闕伯周を立て、高昌王国が建国されたのである。闕伯周は柔然の年号である「永康」を奉じるなど、柔然が宗主国となった。その後も、高昌国は柔然の庇護のもと、国家としての命脈を保っていた。

このような状況の中、南朝の使者が高昌経由で柔然に派遣されている。その交易路を使者が往来していた様子は、近年トルファンより発見された出土文書からもうかがい知れる（「闕氏高昌永康九年、十年（474、475）送使出人、出馬条記文書」（编号 97 TSYM 1: 13, 4-5）『新獲吐魯番出土文獻』, pp.162-163）。この出土文書には、中央アジアから使者を送ってきた国家名が詳細に記されており、それらの使者が草原のルートを通して、モンゴル高原に至っていた様子がうかがえる〔中田 2016: 153-154〕。

また、479年、南朝の齊は、北魏の孝文帝が大軍を侵攻させてきたため、驍騎將軍の王洪範を使者として柔然に派遣し、北魏を挾撃しようと盟約を結んだ。王洪範は西方へ向かい、蜀より吐谷渾・高昌国を経て柔然に赴いている〔榎本 2011: 68-77〕。吐谷渾とは、4世紀初めに鮮卑慕容部の

一部がチベット系の土着の羌族を支配して成立した遊牧国家である。中国の西方、青海一帯を勢力下に置き、地の利を生かし、交易によって栄えた。5世紀半ばに北魏軍の侵攻を受けたため、宋を初めとする南朝との関係を深めていった。おそらく、北魏に対抗するために、南朝の使者を吐谷渾が仲介していたと考えてよいであろう。このように、江南の齊にとって、吐谷渾から高昌国を経由するのは、華北の北魏の領域を避けてモンゴル高原に向かう最善のルートであったと言える。

また、485～486年頃、高昌の北接に高車が移動し、国家を樹立したが、伯周の息子、闕首帰が488年に高車王の阿伏至羅に殺害された。阿伏至羅は張孟明を王とし、高車による高昌の支配が始まり、同時に、高車は、高昌経由でモンゴル高原に向かう交通路をも支配したと考えられる。508年、高車国に対して北魏の宣武帝より下された詔勅文には、「高昌は高車・北魏にとっても重要な地であるので、柔然に交易路を阻害させてはならない」とあり〔中田2016:155-156〕、北魏も、中央アジアからモンゴル高原につながる交易路の重要性を認識していたのである。

唐代になっても、このルートは使用され、「回鶻路（かいこつろ）」と呼ばれていた。「回鶻」とは当時、モンゴル高原から中央アジアへ勢力を拡大していた遊牧民、ウイグルのことである。しかし、彼らが使用していた正確なルートは未だ解明されていない。回鶻路のルートを解明する上でも、ハルザン・シレグ遺跡は非常に重要な意味を持っている。この遺跡のあるシャルガ地域は、中央アジア方面からアルタイ山脈を越えてすぐの場所に位置し、水も豊富で農耕が可能な地であり、食料供給にも利便性が高い。古くから、中央アジアとモンゴル高原を往来する人々はこの地で休息し、その後の旅を続ける活力を得たのであろう（図7の③のルート）。



図7 モンゴル高原～中央アジアの交通路

また、中央アジアからシャルガ地域を経由する交通路が、さらにモンゴル高原でどのように張り巡らされているのか、往来する人々がその交通路上でどのような交流をしていたのかも重要な研究課題である。

交通路の拠点を探るに当たっては、各時代の遺跡はもちろんだが、行き来する人々が岩壁に残し

た銘文もその指針となる。本プロジェクトはモンゴル高原の交通路の調査を重要な目的としており、2017年には交通路の巡検調査も行なったので、これに関してここで考察を加えたい。今回の調査に参加したのは、研究代表者の村岡、共同研究者の中田、研究協力者の松田孝一（大阪国際大学名誉教授）および前述の松川節である。我々は、ウランバートルから、最終目的地であるシャルガ郡のハルザン・シレグ遺跡に向かうため、空路、ザブハン県の県都ウリヤスタイ郊外のドノイ空港に到着した。

我々はまず、チャーターしたジープに分乗し、ドノイ空港の近くにある城郭遺跡を調査した（図8参照）。城郭内には瓦片が散乱し、中央に基壇が見られる。見たところ、それほど古いものではない。実際、清代（17～20世紀初め）に寺院として使われていた建築址であるという。しかし、このような比較的新しい建造物が、それより古い時代のものを再利用し、その上に新たに構築されるという例は数多く、この遺跡もその可能性がないか注目される。例えば、モンゴル帝国時代、前述の長春真人一行は、モンゴル高原を東から西に横断し、この地域を通過しており、『西遊記』は、この地に、「曷剌肖」という「故城」があったことを記している。「曷剌肖」は、その音が近いことから、多くの研究者が現在のウリヤスタイに比定しており、可能性は高い。我々が視察した城郭遺跡の下層にその「故城」がないか、今後、発掘も含めた詳細な調査が必要であろう。いずれにしても、『西遊記』の記述の例からも、この地が交通路の要衝であったことは間違いない。

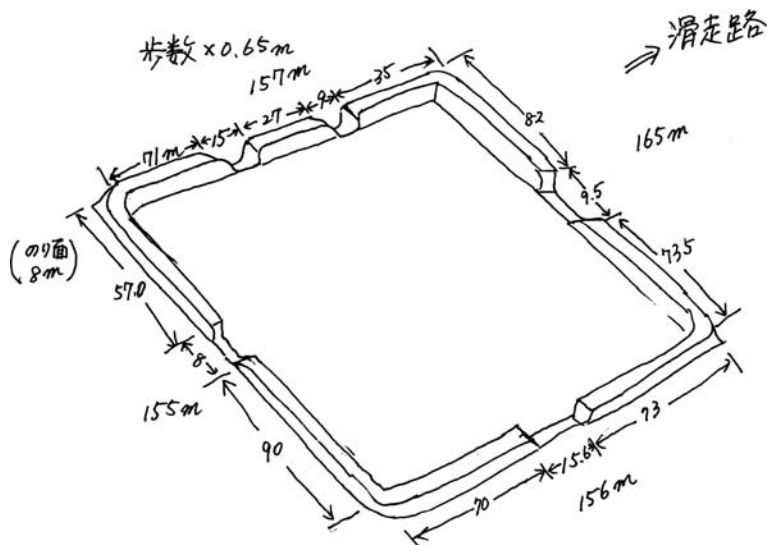


図8 ウリヤスタイ郊外ドノイ空港南土城址〔研究協力者・松田作図〕

一方、遺跡と同じように、交通路の拠点を探る指針となる岩壁銘文については、今回、二つの情報がモンゴル側研究者よりもたらされていた（95頁の図1参照）。一つはザブハン県西部のサントマルガツ郡の銘文であり、上記のウリヤスタイから西へ、直線距離で142kmの地点にあり、切り立った岩壁の表面に墨書により漢文が記されていた。足場がかなり危険で、皆、細心の注意を払って登った後、判読、写真撮影などを行なった。字体からは、そう古いものではなく、清代のものと考えられよう。

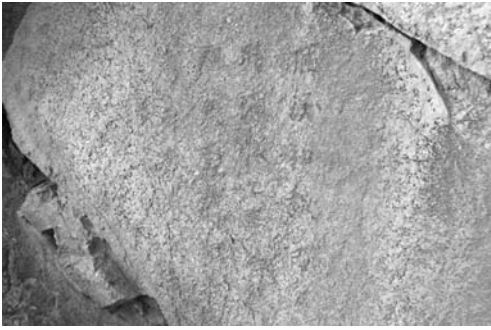


写真7 サントマルガツ銘文1

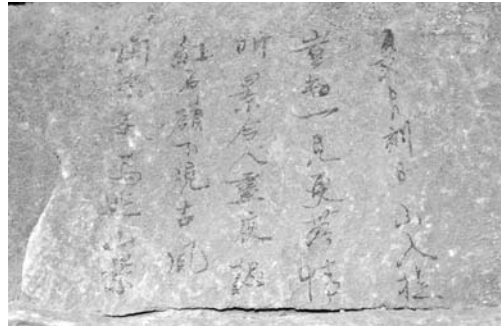


写真8 サントマルガツ銘文2

もう一つの銘文は、サントマルガツ郡から、南へ150 km、我々の最終目的地であるシャルガに向かう途中のゴビアルタイ県ジャルガラン郡にあり、ウイグル文字のものであるということであった。到着後、判読、写真撮影を行なった。モンゴル帝国時代、ウイグル文字はウイグル語だけでなく、モンゴル語を記すのにも用いられたが、本プロジェクトの研究協力者であり、モンゴル帝国時代の言語・文字・文献の専門家である松川によれば、これはウイグル語であり、モンゴル帝国時代、13～14世紀の書体だという。この地域になぜモンゴル帝国時代のウイグル語銘文があるのか。実は、『西遊記』には、長春真人一行が前述の「曷刺肖」から、沙場を西南に20里（約10 km）ほど行くと、「見回紇決渠灌麦（ウイグル人が溝渠を掘り、麦畑を灌漑しているのを見た）」と記されている。ジャルガラン郡には、我々が2001年に最初に調査した際、『西遊記』が記すウイグル人の農耕地と比定した農耕地跡がある〔村岡2003：5-8〕。松川は、ここにウイグル語の銘文が残されているのは、『西遊記』の記述を裏付ける証左となるのではないかという私見を述べている。まさしく卓見であろう。



写真9 ジャルガラン銘文

サントマルガツ郡の銘文もジャルガラン郡の銘文も、今のところ詳細な解読は難しいが、両地域が交通の要衝であったことは間違いない。サントマルガツ郡の銘文は、記されていたのが漢文であり、このような北辺に、漢人が訪れていたことは注目に値する。この地の交通路の要衝としての重要性を示すものであろう。

IV. 仏像出土のハルザン・シレグ遺跡再調査とチンカイ城の意義再考

以上の地域を調査した後、我々は、最終目的地であるシャルガ郡のハルザン・シレグ遺跡を訪れた。我々が到着する前より、モンゴル側の主導で発掘は行なわれていたが、我々も遺跡を綿密に調査した。2016年に出土した仏像の足部は再び掘り出されており、さらにその周りも広く発掘が進んでいた。前述のモンゴル側の報告では触れられていないが、仏像が発見されたことから、それを取り囲む建造物が寺院であるという可能性については、モンゴル側の研究者は、今のところ確定で

きないと慎重であった。食料の残骸と考えられる骨や生活用の陶器の破片などが出土しており、生活居住空間であった可能性が高いという。仏像はその建造物の一角にある祠（モンゴル側は「お供え物部屋」と表現している）に安置されており、人々の崇拜の対象になっていたことは確かである。また、本プロジェクトでは、特にドローンによる遺跡やその周辺の景観調査も主たる眼目に置いた。撮影した写真の一部については、すでに96頁に示した通りである。

さて、今回も、調査後、出土した骨や木炭をC14測定法で分析を行なった。その結果、加速器分析研究所の報告にあるように、骨片に関しては、12世紀の終わりから13世紀半ばの範囲の値が示されている。2014年、16年の分析結果と同様、チンギス・カンがチンカイ城を設立させた1212年を中間に含む。骨片はヤギやヒツジのものであり、食料とされたことは疑いがなく、この時期に人間が生活をしてきた痕跡を示し、ハルザン・シレグ遺跡がチンカイ城であることを補強する成果であった。

また、今回は、前2回より広い範囲で発掘調査を行なったが、各所から出土した木炭は、C14測定法による分析の結果、かなり広い時間幅を持つことがわかった。104頁の表2を見ると、それは、11世紀から14世紀にわたっている。モンゴル帝国以前より、この地が交通路の要衝であったことは前述の通りであるが、14世紀後半まで存続したモンゴル帝国のほぼ全時代において、チンカイが機能していたことの証しであろう。

チンカイが、1212年の設立から14世紀半ばまで、長くモンゴルにとって重要な拠点であったことは、プロジェクトの研究協力者である松田が、すでに漢籍史料から明らかにしており[松田2006]、今回、それを裏付ける物的証拠が得られたと言ってよい。松田の作成したチンカイ・バルガス（称海城）屯田年表を次に挙げておく（一部、人名等を本稿との整合性を考え、改変した）。

1) 前期 チンギス・カン政権時代の建設からクビライ政権成立に伴う廃止・空白期

年	月	日		典拠
1212			田鎮海、チンギス・カンの命を受けて、アルタイ方面のアルゴン（ウリヤンカンとも記載）の地に屯田と都市建設 ⇒ チンカイ城設立	『元史』120 鎮海伝 『圭塘小稿』10 元右丞相怯烈公神道碑
1265	01	癸酉	クビライが中国で即位。 モンゴル高原のチンカイ、パイバリク、ケムケムジュート3地区居住の諸種工芸職人戸を新たに首都となった中都（北京）に移住させる。 移住費用として銀1万5千両を給与（3都市位置関係からチンカイはモンゴリア西部の最大都市であることがわかる） ⇒ この記事は1261年の年次の記載のある類似の記事がある	『元史』6 世祖本紀3 ⇒ 蘇天爵撰『元文類』42 玉工参照
1270	秋		皇太子の裕宗（チンキム）はチンカイを巡撫、冬、首都へ帰還 八丹も裕宗に従いチンカイへ （ノモガンの西方進出の見送り）	『元史』115 裕宗伝 『元史』134 小云石脱忽憐伝

2) 中期 辺境屯田としての機能不明時期

1284	06	甲子	モンゴル高原の中心地であつての首都カラコルム駐屯の1000人を五（条）河で屯田させる。	『元史』13 世祖本紀10 『元史』100 兵志3
------	----	----	---	------------------------------

1285	01	戊子	五条河屯田軍をウシバン、ジャシバンに移動	『元史』14 世祖本紀 11
			カラコルム屯田を五条河に合併	『元史』58 地理志 1
1289			中央アジアの反元朝モンゴル勢力カイドの侵攻	
			チンカイに居住する兵士への食糧供給関連記事	『大元倉庫記』納蘭不剌倉 蘇天爵撰『滋溪文稿』22 呉公行状

3) 後期 屯田発展期

1295			首都の漢軍 1000 名をチンカイに派遣, 屯田	『元史』58 地理志 1 『元史』100 兵志 3
1296	秋		中央アジアの反元朝勢力ヨブクルらアルタイ（玉龍海～玉龍罕の地）で投降（第 1 次投降）	『元史』128 土土哈伝 『集史』テムル（成宗）紀
	02	己亥	チンカイの屯田兵士に農具を給付	『元史』19 成宗本紀 2
1297	01	己丑	カラコルムの漢軍の一部を五条河で屯田, 毎年納入される租税米を投降民へ供給	『元史』19 成宗本紀 2
	03	庚寅	チンカイの職人に農具購入金 22900 余錠を給与	『元史』19 成宗本紀 2
1298	01		チンカイで 4～5 年対陣消耗した漢人, 女直, 高麗等の兵 2136 名と新着 2200 名が交代 ⇒消耗兵士は 1295 年派遣屯田兵を指す	『元史』99 兵志 3 (⇒1295 年の項参照)
	秋		元朝のアルタイ防衛軍の綱紀弛緩, 冬, カイド軍の侵攻を受け, 全軍壊滅	『集史』テムル（成宗）紀 他
1299			王子カイシャンを辺境軍再建のため派遣 配下の河南モンゴル軍がチンカイで屯田	『元史』22 武宗本紀 1 『山右石刻叢編』37 忽神公神道碑銘并序
			五条河の漢軍をすべてチンカイに移動	『元史』100 兵志 3
1300	02	戊午	チンカイ屯田廃止, カジャ（呵札）に屯田を置き, 農具, 種実を給付する	『元史』20 成宗本紀 3
			王子カイシャン, 金山南のコプリでカイド軍と会戦	『元史』22 武宗本紀 1
1301	05		チンカイの倉庫関係記事	『大元倉庫記』
	07	癸亥	チンカイから北境までの 12 駅で大雪のため馬牛が多く死に, 鈔 1 万 1 千余錠を給与。	『元史』20 成宗本紀 3
	08		元朝軍は, アルタイ越えて侵攻のカイド・ドアとザブハン河のトグルクで会戦。元軍壊滅, カラコルム官僚, 倉庫焼却し逃亡。カイドも戦傷死	『集史』オゴデイ（太宗）紀 『元史』132 玉哇失伝
	09	癸丑	チンカイ倉庫守備隊を中国に帰還, 以後交代制	『元史』20 成宗本紀 3
1302	09	乙未	チンカイ屯田の歳入額の会計監査実施。	『元史』20 成宗本紀 3
1306			アルタイ方面元朝敵対勢力第 2 次投降	『元史』119 博爾忽伝
1307	07	癸酉	投降民激増でモンゴル高原行政事務増大。行政機関「嶺北行省」設立。 下部機関チンカイ宣慰司・都元帥府・カラコルム総管府設置。 この時点でもチンカイは首府カラコルムに次ぐ, モンゴリア西部最大拠点。	『元史』22 武宗本紀 1

1308			チンカイ屯田が廃れ、再建。 年 20 余万石の収穫。以前の灌漑施設を再整備、漑田数千頃⇔ 1328 年記事の面積と比較せよ	『元史』136 哈剌哈孫伝 『元文類』25 丞相順德忠献 王碑
1310	07	庚寅	チンカイのイエケ・ジャルグチ（大断事官）を廃止し、ヨブクルは通例に従い、王府官 6 員の設置を要望、承認。 アルタイ方面ウリヤンカンのヨブクルの領地がチンカイに近いことを示す。	『元史』23 武宗 2
1311	05	丁巳	嶺北行省右丞ボリとマスードがチンカイ屯田の監査	『元史』24 仁宗本紀 1
1312	01	丁卯	チンカイ屯田の漢軍を救済	『元史』24 仁宗本紀 1
	02	丙子	チンカイ屯田に牛 2000 頭を給付	『元史』24 仁宗本紀 1
1314	04	丁亥	チンカイと五河屯田に粟を備蓄	『元史』25 仁宗本紀 2
1316			チンカイ屯田を廃止し、五条河屯田を再設置	『元史』100 兵志 3
1319			モンゴル兵 5000 人を選び、チンカイに再屯田	『元史』100 兵志 3
1319	11	庚子	晋王の貧民 2000 人をチンカイに屯田させる	『元史』26 仁宗本紀 3
1320	05	己丑	クビライの旧制に従い、チンカイ・五条河両地に屯田設置。兵 1000 人を五条河で屯田させる。	『元史』100 兵志 3 『元史』27 英宗本紀 1
1323	02	辛卯	チンカイ宣慰司と万户府廃止、屯田総管府（嶺北行省）・屯田万户府を設置。 モンゴル高原の屯田統計は戸数で 4648 戸、面積で 6400 頃（約 360 km ² ）	『元史』28 英宗本紀 2 『元史』100 兵志 3
1350 年代			元朝順帝トゴン・テムル、アルタイを領地とする諸王アルフイ・テムル懲罰のために軍を派遣、チンカイでカラチ 1 万人を徴兵。訓練の足りない兵士たちが逃亡、元軍敗退。	『元史』206 叛臣伝、阿魯輝帖木児

表からは、元朝時代を通して、チンカイが機能していたことが読み取れる。前稿では長春真人一行が、チンカイの地を訪れた 13 世紀前半、ここには千家もの漢人が居住しており、出土した仏像は、彼ら漢人たちのために作られたことを指摘した [中田・村岡 2018: 30-31]。つまり、北中国から連行された漢人たちは奴隷扱いされていたわけではなく、モンゴルは彼らの信仰を尊重していたことを示す。野蛮で暴虐という先入観を持たれがちなモンゴルであるが、決してそうではないことがわかる事実であろう。表から、14 世紀に入っても、チンカイでは屯田が行なわれていたことは明らかであり、その農耕に従事していたのは、漢人などの農耕民であったと思われる。モンゴルにとって、漢人との融合は重要だったのである。

実は、元末の混乱の中にも、モンゴルと漢人の融合の様子が見て取れる事実がある。中国の正史として、『元史』の次に位置付けられる『明史』巻 124 には、元朝最後の命運を託されたココ・テムル（擴廓帖木児）の列伝が残されている。彼は、1351 年に勃発した「紅巾の乱」に対して、反乱軍討伐に立ち上がった河南の軍閥チャガン・テムルの甥で、その養子となった人物であり、養父の戦死後、軍団を受け継いだ。中国本土の中心部、河南地方で生まれ育ったチャガン・テムル、ココ・テムルの軍団には、数多くの漢人も含まれていた。これをもってして、村岡は、かつて「元王朝対明王朝」があたかも「モンゴル民族対漢民族」のように言われたことがあったが、決してそうではなく、いまや命運が尽きようとする元朝を、命がけで守ろうとした漢人たちも数多くおり、これこそが、モンゴル・元朝の真の姿であると指摘した [村岡 2014: 195]。

その後、ココ・テムルは、元朝の中国本土放棄後もモンゴル朝廷と共に各地で明軍と転戦し、ついには先祖発祥の地であるモンゴル高原に戻った。初めて見る父祖の地であった。明の北伐軍に大勝するなど最後まで奮戦したが、1375年、西北モンゴルの陣中で亡くなった。『明史』の擴廓帖木兒伝には次のようにある。

其の後、擴廓、其の主に従い、金山に徙り、哈剌那海の衙庭に卒す。其の妻毛氏もまた自ら経死す（首をくくって死ぬ）。蓋し洪武八年（1375）なり。

「哈剌那海」という地の具体的な位置は不明であるが、それは「金山」、すなわちモンゴル西部のアルタイ山にあり、その「衙庭（官府の地）」でココ・テムルは死去し、その妻である漢人の毛氏もこの地で夫に殉じたという。

アルタイ地方で官府と言え、上記の表で示したように、チンカイ以外にはない。ココ・テムルはチンカイで最期を迎えたのである。逆に言えば、チンカイは1375年までその機能を果たしており、表2のC14測定法の下限は、まさしくその時期を示している。また、その後の年代を示す遺物がないことは、ココ・テムルの死と共に、チンカイが打ち捨てられた明証となろう。もちろん、今後の発掘で今回発掘した場所以外から、それ以降の年代の遺物が出土する可能性もあり、あくまで現時点での見解としておきたい。

おわりに

最後に、本プロジェクトのきっかけとなったハルザン・シレグ遺跡より出土した仏像について、その後の状況を記しておきたい。前述の通り、仏像の足部は台座と一体化して地面に貼りついており、2016年の調査では、発掘現場に残し、そのまま埋め戻さざるを得なかった。2017年の調査では、この貴重な文化財を保護するということも重要な目的であった。モンゴル側の発掘調査に同行した文化財保護の専門家によって、粘土製の仏像の足部に固めるための薬品が塗られ、乾かし、そしてまた薬品を塗り込むという作業が数日かけて繰り返し行なわれ、崩れないように固めた後に、丁寧に切り出された。そして、調査終了後、他の出土物と合わせてウランバートルへ運搬され、オチルの所属するモンゴル国際文明研究所に保管されたのである。これについても、国際社会文化研究所および本学研究部が全面的に費用を負担した。



写真 10 仏像に薬品を塗る作業 1



写真 11 仏像に薬品を塗る作業 2

その後、我々はオチル教授やモンゴル国際遊牧文明研究所所長プレブジャブ氏と協議し、仏像の歴史的価値に鑑み、現地のゴビアルタイ県博物館に寄贈することにした。その式典に合わせ、2018年9月に、我々日本・モンゴル合同調査隊の研究メンバーによって、これまで20年以上にわたってなされてきた研究の一端を広く知らせるため、モンゴル国立博物館で「草原の文化・宗教交流と文字資料」という特別展が開催され、それに合わせてモンゴルを訪問した入澤学長が開会の辞を述べた。そして、その後、学長からゴビアルタイ県シャルガ郡文化センター長エンフバヤル氏への寄贈の式典も行なわれ、仏像はじめ出土物は国立博物館の特別展でしばらく展示され後、ゴビアルタイ県に返還されたのである。詳細は本学ホームページでも過去に紹介された。



写真12 特別展開催に当たり、開会の辞を述べる入澤学長（右から2人目がオチル教授、3人目がプレブジャブ所長）



写真13 仏像など出土品を入澤学長から寄贈

展示会や式典には一般の人だけでなく、報道機関も多数訪れて取材するなど、モンゴルでも、チンギス・カン時代の仏像という歴史的な発見は多くの人々の関心と呼んだ。それを踏まえ、本稿でも何度か引用した中田・村岡による仏像の発見とその研究である中田・村岡2016が、モンゴル国において、モンゴル語に翻訳の上、刊行され、それに伴い、2019年9月4日には、ウランバートルのモンゴル科学アカデミー本部ビルにおいて、出版記念会と研究シンポジウムが開かれた。その模様も本学ホームページで紹介された。本学では、現在、モンゴルの仏教遺跡調査を、380周年記念事業の一環として位置づけている。今後もモンゴルにおける研究調査を続け、国際的な貢献度を高め、かつ研究成果をあげていきたい。

参考文献

- A. Очир, А. Энхтөр 2006: “МОНГОЛ-ЯПОНЫ “БИЧЭЭС-2” ТӨСЛИЙН 2004 ОНЫ ХЭЭРИЙН ШИНЖИЛГЭЭНИЙ АНГИЙН МОНГОЛЫН ТАЛЫН ТОВЧ ТАЙЛАН” (附・清水奈都紀訳)「モンゴル・日本合同「ビチエースⅡ」プロジェクト2004年調査団、モンゴル側簡報」文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「中世考古学の総合的研究ー学融合を目指した新領域創生ー」(領域代表: 中央大学教授・前川要)〈公募班〉『中世北東アジア考古遺蹟データベースの作成を基盤とする考古学・歴史学の融合』平成16・17年度研究成果報告書(代表: 龍谷大学助教授・村岡倫, 以下『村岡科研報告書』と略), pp.21-34.
- A. Очир 2016: “МОНГОЛ-ЯПОНЫ “БИЧЭЭС” ТӨСЛИЙН ХҮРЭЭНД ШАРГЫН ХАЛЗАН ШИРЭГТ ХИЙСЭН СОРИЛЫН МАЛТЛАГЫН ЯВЦ, УРЬДЧИЛСАН ҮР ДҮНГЭЭС” (附・清水奈都紀訳)「モンゴ

- ル・日本「ビチュース」計画の一環でシャルガのハルザン・シレグで行った試掘調査の状況、予備的考察から」松田孝一〔編〕『13-14世紀モンゴル史研究』1, pp.9-32.
- A. Очир, Л. Эрдэнэболд 2017: “МОНГОЛ-ЯПОНЫ БИЧЭЭС-2 ТӨСЛИЙН ХЭЭРИЙН СУДАЛГААНЫ ҮР ДҮН ХАЛЗАН ШИРЭГ БАГАСНЫ МАЛТЛАГА СУДАЛГАА”, *Монголын археологи-2016*, Ulaanbaatar, pp.219-226.
- A. Очир, Л. Эрдэнэболд, Г. Мандахбаяр 2018: “ХАЛЗАН ШИРЭГ БАГАСНЫ СУДАЛГААНЫ 2017 ОНЫ УРЬДЧИЛСАН ДҮНГЭЭС”, *Монголын археологи- 2017*, Ulaanbaatar, pp.223-229.
- 榎本あゆち 2011: 「南斉の柔然遣使 王洪範について——南朝政治史における三齊豪族と帰降北人」『名古屋大学東洋史研究報告』35, pp.65-96.
- 加速器分析研究所 2014: 『ハルザン・シレグ遺蹟における放射性炭素年代 (AMS 測定)』, (株) 加速器分析研究所報告書 (『13・14世紀モンゴル史研究』1, 2016年, pp.41-48に転載).
- 2016: 『ハルザン・シレグ2遺蹟, 同3遺蹟における放射性炭素年代 (AMS 測定) および炭素・窒素含有量測定』, (株) 加速器分析研究所報告書.
- 2017: 『ハルザン・シレグ遺蹟における放射性炭素年代 (AMS 測定) および炭素・窒素安定同位体分析』, (株) 加速器分析研究所報告書.
- 白石典之 2008: 「モンゴル国シャルガ遺跡出土遺物について—陶磁器資料を中心にして—」平成17~19年度科学研究費補助金・基盤研究 (B) 『内陸アジア諸言語資料の解説によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究』 (代表: 大阪国際大学教授・松田孝一) 研究成果報告書, pp.241-258.
- 鈴木宏節・中田裕子 2006: 「2004年度モンゴル国調査記録」『村岡科研報告書』, pp.1-20.
- 中田裕子 2016: 「遊牧民の歴史と農耕」龍谷大学農学部食料農業システム学科〔編〕『食と農の教室1 知っておきたい食・農・環境 はじめの一步』, 昭和堂, pp.140-158.
- 中田裕子・村岡倫 2018: 「アルタイ地方におけるモンゴル帝国時代の仏像の発見とその意義—2016年現地調査の報告をかねて—」『東洋史苑』90, pp.1-37.
- 松田孝一・村岡倫・白石典之 2002: 「2001年モンゴル国史蹟調査記録」平成12・13年度科学研究費補助金・基盤研究 (B) (1) 『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』研究成果報告書 (代表: 大阪国際大学教授・松田孝一), pp.201-219.
- 松田孝一 2006: 「クビライ政権時代のチンカイ地区 (割記)」『村岡科研報告書』, pp.47-54.
- 松田孝一〔編〕2016: 『13-14世紀モンゴル史研究』1, 大阪国際大学.
- 村岡倫 2003: 「モンゴル西部におけるチンギス・カンの軍事拠点 —2001年チンカイ屯田調査報告をかねて—」『龍谷史壇』119・201, pp.1-61.
- 2006: 「チンカイ屯田と長春真人アルタイ越えの道—ハルザン・シレグ遺蹟調査の総括—」『村岡科研報告書』, pp.35-46.
- 2007: 「チンカイ城と長春真人アルタイ越えの道—2004年現地調査報告をかねて—」『龍谷史壇』126, pp.1-35.
- 2014: 「從石刻史料探究探馬赤軍の歴史」『西域歴史語言研究集刊』第7輯, pp.187-198.

※前述のモンゴル国際遊牧文明研究所のプレブジャブ所長が2019年2月に急逝された。プロジェクトのメンバー一同、驚きを隠せない。生前の我々の研究調査へのご尽力に厚く感謝すると共に、ここに謹んで哀悼の意を述べたい。

※本研究は、本文でも述べた通り、龍谷大学国際社会文化研究所および本学研究部の研究支援を全面的に受けて行なわれたものである。記して感謝の意を表したい。